からだが語ることは・ からだで語ることは

神戸大学教授 舞踊学研究者 柴 眞理子^{しば まりこ}

「コミュニケーション」といえば言葉」と思われる方が多いと思いますが、
そうでしょうか？

最も原初的な形態である対面での「コミュニケーション」について考えてみましょう。対面での「コミュニケーション」とはその場に私たちの生きたからだが存在していることを意味し、そこでは、お互いに発する言葉のみならず、声の大きさや速さ、リズム、そして姿勢、身振りや表情といったお互いのからだから発せられる感性的な情報も無意識のうちに送り、また受け取りながら、言葉をやりとりし、「コミュニケーション」をしているのです。実は、言葉以上に言葉以外の要素が、その場における言葉の意味の真意や深さを伝え、その人の内面を表しています。

私たちはそういったからだが語る言葉を読み取る力を本来もっているはずなのですが、例えば、メールのように、その場から切り離され相手がみえない形態での「コミュニケーション」に頼るようになってくると、他者のからだが語る言葉を読む能力が低下し、現実感も薄れ、他者との気持ちや考えの共有も難しくなります。「このことは、人間にとって大事な「人間ひとりひとり即ち、あなたもわたしも、それぞれかけがえのない存在である」といつ確信を抱きにくくなっていることを意味します。この確信をもてるようにすることが、教育に求められる大きな課題であると思います。そのためには、豊かな「コミュニケーション」の体験が有効であり、そのような体験の場の一つとして、ダンスを共に創り、踊り、みる「場をあげる」ことができます。

例えば、「風」をテーマに、仲間と共にダンスを創るには、まず各人が「風」から何を感じ、「風」をどうとらえるのか、自分の内面をみつめて自分の内なる声を聞き、表現内容のイメージを描くことで始まり、次にお互いのイメージを言葉や動きあるいは絵などで出し合い、一つのイメージにまとめあげていきます。その後、イメージにふさわしい動きをひとりひとり、あるいはみんなで創出し、それらの動きを構成して一つの作品を作りあげていきます。完成後は、カウントで動きを合わせるのではなく、息で動きが合うまで踊りこみます。そして、発表。見る側は、目に見える動きを通して、目に見えない踊り手の内的世界を感じ取るのですが、その感じ方は、踊り手と見る者の内的世界の掛け算の結果なのです。

このように、「ダンスを共に創り、踊り、みる」プロセスには、他者との言語的、身体的「コミュニケーション」と同時に、自分の内とのそれがあり、この内と外、二つの「コミュニケーション」が循環する中でいままで知らなかった自分に、また自分と違う感じ方、考え方、行動の仕方があることに気づき、ひとりひとりの確かな存在を無意識のうちに感じ取っていくのです。そして、それは、当然、からだで語る力を培つと「同時にからだが語る言葉を読む力を取り戻し、磨いていくプロセスそのものです。

からだが語り（無意識的）からだで語る（意識的）としてからだを読む。「これらは豊かな「コミュニケーション」の基盤なのです。

言葉とは、あなたの存在そのものをかけて発せられるとき、相手に深く受け止められるものであり、言葉の力とは、あなたの存在の力とも言えるのではないのでしょうか。